The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハイデルベルク逍遥 : 両大戦間期におけるドイツ文化受容についての覚え書き
Author(s)	三谷, 研爾
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2022, 56, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハイデルベルク逍遥

――両大戦間期におけるドイツ文化受容についての覚え書き――

三 谷　研 爾

キーワード：日独交流／ハイデルベルク／新カント派／文化主義／自然主義

ザイフェルトが中心となってハイデルベルク大学日本学科でおこなった共同研究によると、明治維新から1914年までの約半世紀にドイツ各地の大学に在籍した日本人留学者の総数は1700名以上、その過半はベルリンを主たる目的地とし、以下ミュンヘン、ライプツィヒ、ゲッティンゲンなどに分散していたという。この間、ハイデルベルクに学んだのは82名、つまり毎年1～2名である。[1)] 周知のように、第二帝政期のドイツでは自然科学系の諸分野の発展がいちじるしく、それはまたイギリスをも凌駕する工業国化と軌を一にしていた。この趨勢から、多くの留学者が自然科学の最新知識を求めてドイツをめざす一方、のちの社会科学につながる国家・官房学を学ぶもの、さらには軍事研究に従事するものもあった。だがドイツ留学は、第一次世界大戦中は日独が交戦国となったことから完全に中断する。大戦後、1920年代になって学術交流が再開されると、にわかに顕著となったのは人文科学分野の留学者の増加である。そのさい、滞在先として積極的に選ばれたのがハイデルベルク大学だった。

じっさい1921/22年冬学期に4名だった学籍登録者はその後、各学期とも10余名を数える。もっとも多かったのは1923/24年冬学期の22名で、うち15名が哲学部に籍を置いていたという。この傾向は1920年代前半を通じて持続するが、世界恐慌をへてナチス党が勢力を伸張する1930年代初頭にかけて漸減し、第二次世界大戦の勃発とともに往来じたい再び中断されるにい

たった。[2] ただし、これらのデータはあくまでも正式に学生登録をおこなった滞在者の人数であり、それ以外にも、ハイデルベルクに一時滞在しながら正規学生にならずに授業を聴講していた遊学者が相当数いたと思われる。たとえば 1923 年夏学期、ハイデルベルク大学に新規登録した学生は 1000 名程度だったというが、日本からの留学者や聴講者が 30 名から 40 名いたとすれば、それはけっして小さな数ではない。1922 年にハイデルベルクを訪れた瀧川幸辰が、哲学者リッケルトの講義室を覗いたところ「前列二列くらいは黒い頭の日本人がずらりと並んでいた」[3] というのは、そうした事情の証言である。

だが注目すべきは留学者数だけではない。当時のハイデルベルクには阿部次郎、恒藤恭、天野貞祐、九鬼周造、高橋里美、石原謙、黒正巌、三木清、羽仁五郎、大内兵衛など、大正期から昭和期にかけての人文社会科学の代表的な研究者・知識人が行き合わせた。これに第一次世界大戦前に同地で学んだ波多野精一、朝永三十郎、吉野作造を加えると、その群像はまことに壮観というほかない。ハイデルベルク滞在について彼らが残している報告や回想は少なくないが、その主たる話題は指導を受けた教授たちの横顔と歴史的インフレーションのさなかにあったドイツでの日常生活である。この錚々たる顔ぶれを考えれば、彼らが個別に得たハイデルベルクでの経験を相互に関連させ、さらに同地の学問伝統とも接合させて立体的に理解するという思想文化史的なテーマが浮上するのはごく自然なことといえよう。

そのもっとも早い試みは加藤将之『ハイデルベルクの神話』である。[4] 副題に「新カント派時代万華鏡」とあるとおり、19 世紀後半から 1930 年代にかけて教壇に立った哲学者たちの姿が随想風に描き出されている。その眼目は、先に挙げた日本人留学者たちの証言を引きながら、とりわけリッケルトと周辺の学者たちの生態を軽妙な筆で紹介していくところにある。文化史的背景の説明、教授たちをめぐるさまざまなエピソードと著者自身の感懐とが融通無碍に混在しているが、基調は往時を懐かしむレトロスペクティブなものだ。

これにたいし、プファルツ選帝侯国の首都だったハイデルベルクの歴史を遡りつつ大学史を語り、さらに20世紀前半のドイツの思想状況を照射したのが生松敬三『ハイデルベルク　ある大学都市の精神史』である。[5)] そこには都市史、文学史から科学史にいたるまで、該博な知識が惜しみなく披露されていて、ハイデルベルクを舞台にした絢爛たる思想文化史絵巻の趣きとなっている。その記述が、主として三木清と阿部次郎の回想に拠って1920年代の哲学や思想におけるハイデルベルク大学の位置を顧みたところで閉じられるのは、両大戦間という時代の思想史的な重要性と重層性を語りつづけたこの著者ならではの強い問題意識の反映にほかならない。他方、旧制高校時代の『アルト・ハイデルベルク』体験を紹介する冒頭のくだりなどから、昭和前期の読書文化への淡いオマージュもまたうかがわれる。

日本におけるこれらの仕事をふまえたうえ、現地に残る留学生関係資料を精査したのが、冒頭に引いたザイフェルトたちの研究である。そこでは、1920年代にハイデルベルク大学に学籍登録をした代表的な10名の留学者について、それぞれの経歴と専門分野での業績を確認したうえで、学籍簿などから留学動機、受講科目、同地での活動が丹念に掘り起こされている。日本語資料の活用という面では制約があったものの、留学者自身が提出したドイツ語の経歴説明や留学動機などが発見されたことで、検証はあらたな段階に入ったというべきだろう。そこで本稿も、このザイフェルトの研究を足がかりにしながら、当時なぜあれほど多くの日本人留学者がハイデルベルクをめざしたのか、彼らがそこに期待したものは何だったかを考える糸口を探ってみたい。彼らはいずれも、それぞれの分野で大きな足跡を残した専門家であり、その多方面にわたる膨大な仕事から共通するハイデルベルク留学の成果を取り出すことには無理がある。しかしながら彼らの留学を、第一次世界大戦後の不安定なヨーロッパ、とりわけ敗戦国ドイツの社会文化的環境と、多かれ少なかれ大正教養主義をバックボーンとしていた日本知識人との接触という構図でとらえ、その接触経験のうちにいわば協和音と不協和音をともに聴取しようというのが、本稿の企図である。

留学者たちのプロフィール

ザイフェルトは、1920年代にハイデルベルクに滞在した日本人留学者たちの経歴の共通点をつぎのようにまとめている。彼らは「ドイツ留学時には、ほぼ全員がすでに日本の大学で学位を得て定職についており、しかも30代ないし40代を迎えていた。そして帰国後には、その大半が重要な人物となった」。[6] じっさいザイフェルトが検討対象とした10名は、目次に挙がっている順に阿部次郎（1883-1959）、天野貞祐（1884-1980）、三木清（1897-1945）、九鬼周造（1888-1941）、北昤吉（1885-1961）、石原謙（1882-1976）、羽仁五郎（1901-1983）、成瀬無極（1885-1958）、大内兵衛（1888-1980）、赤松要（1896-1974）で、その半数はすでに大学で安定した職を有していた。自由な立場で長期留学をつづけた九鬼、北、三木、羽仁にしても、おりからのハイパーインフレによるマルク安の大きな恩恵を受けて、余裕ある滞欧生活を送っていたのである。

この10名のうち赤松、三木、羽仁の3名以外は、30～40歳代という人生でもっとも活動的な時期での滞欧だった。それにたいし赤松たちは20歳代での留学であり、羽仁にいたってはまだ21歳である。つまり彼ら10名は15年前後の年齢差を有するふたつの世代に大別される。そしてこれは、加藤周一が指摘した「1885年の世代」と「1900年の世代」という世代論的な枠組にみごとに合致する。加藤は、前者について日露戦争後の時期に青年期をすごし、国家から離れて自己の問題に専念することに目を開かれた世代、後者について第一次世界大戦をはさむ時期における資本主義の深まりをまえにマルクス主義と対決する一方、西洋文化に強く傾倒した世代、と規定した。[7] だが1900年の世代は、ハイデルベルク滞在の時期にはまだ独自の地歩を固めるにはいたっておらず、1885年の世代が切り拓いた道を追うことによって、自身の方向性を模索する最中だったといえよう。両世代の志向が分岐を示すのは1920年代後半以降、とりわけマルクス主義との対峙を迫られてからだ。ハイデルベルクで行き合わせていた時点では、両世代は文化的環境をともにし、かつまた学問的志向を共有していた。その環境が大正教養主義で

あり、その志向が新カント派の哲学だったである。

新カント派という道標

これほど多くの知識人がハイデルベルクに赴いたのはなぜか――その直接的な動因は、当時のハイデルベルク大学が新カント派の牙城だったことにある。たとえば三木清は『読書遍歴』で「私がハイデルベルクに行ったのは、この派［新カント派］の人々の書物を比較的多く読んでいたためであり、リッケルト教授に就いてさらに勉強するためであった」[8] と明言している。いったい『読書遍歴』という文章じたい、地方出身の若者が師友に出会い、読書を重ねるうち学問の世界にすすむにいたった道程を回顧する、さながら一篇の教養小説のようなエッセイだが、行文からは大正期の知識人青年の姿があざやかに浮かび上がってくる。

> 私が［…］新カント派の影響を受けたのは、高等学校の時の読書会でヴィンデルバントを読んだことが素地をなしていたのであろうが、その時代のわが国の哲学の一般的傾向にも関係があったであろう。［…］私が大学に入学した大正6年［1917］は、西田先生の画期的な書物『自覚における直観と反省』の現われた年であるが、やはりその年に桑木厳翼先生の名著『カントと現代の哲学』が出ている。これはカント哲学への入門書として私の熱心に読んだ本であった。その前年には朝永三十郎先生の名著『近世における「我」の自覚史』が出ている。私は一高にいてこの本を感激をもって読んだのであるが、その立場は新カント派である。そしてやはり大正6年の暮にはリッケルトの弟子であった左右田喜一郎先生の名著『経済哲学の諸問題』が出ている。これも私には忘れられない本である。左右田博士の影響によって、その頃からわが国の若い社会科学者、特に経済学者の間で哲学が流行し、誰もヴィンデルバント、リッケルトの名を口にするようになった。日本における新カント派の全盛時代であった。[9]

新カント派 Neukantianer とは、自然科学の飛躍的発展とそれを背景にした産業社会化が進行する 19 世紀後半のドイツにあって、あらためてカント哲学に立ち戻ることで、真理・道徳・美など人間的諸価値が占めるべき場所を根拠づけようとする思想潮流である。この潮流は、ちょうどドイツ統一問題が最終的な局面を迎えていた 1860 年代後半以降、マールブルク大学とハイデルベルク大学を中心に展開し、おおむね 1930 年ごろまでドイツにおけるアカデミックな哲学研究の主流となった。そのなかでハイデルベルクは、フィッシャー Kuno Fischer（1824-1907）、ヴィンデルバント Wilhelm Windelband（1848-1915）、リッケルト Heinrich Rickert（1863-1936）などを擁して価値哲学の拠点となり、近隣のフライブルク大学、当時はドイツ領内にあったシュトラースブルク（ストラスブール）大学とともに、いわゆる西南ドイツ学派を形成したのである。[10] フィッシャーとヴィンデルバントは哲学史家としての令名も高く、その著作は西洋哲学の流れを概観するのに格好のテクストとして日本でも広く読まれた。明治期後半になって哲学の分野でも範をドイツにとって専門化・制度化が進むなか、研究はまず新カント派の哲学史理解を学ぶところから始まるとされた。やがてヨーロッパ留学となれば、ハイデルベルクの哲学者たちの謦咳に接しようというのもごく自然ななりいきだろう。

人的関係のレベルでみると、東京帝大の教壇に立ったケーベル Rafael von Koeber（1848-1923）がフィッシャーのもとで博士号を取得するなどハイデルベルク大学と結びつきがあったこと、西田幾多郎、波多野精一、和辻哲郎、阿部次郎、九鬼周造らがそろってケーベルの教えを受けていたことも、日本からハイデルベルクへの道をいっそう近くしたと思われる。明治末期から大正期にかけての知識人社会は相識のある狭小な世界であり、たがいに紹介・推挽しあいながらドイツのアカデミズムとの交流回路を維持したのである。

自然主義への反措定

大正期の思想文化は、一方に白樺派のはなばなしい文学活動を、他方に旧制高校卒のエリート青年に広く受け入れられた教養主義を配して語られることが多い。たとえば久山康はすでに1950年代後半、白樺派の人道主義、左右田喜一郎の唱導した文化主義、阿部次郎の『三太郎の日記』に典型的に窺われる教養主義、さらに西田天香や倉田百三などが実践した宗教的求道主義という4つの柱を立てて状況を説明し、かつその背景として第一次世界大戦を契機にした日本の急速な経済成長と社会発展を指摘している。[11] だが久山が描いてみせたこの見取り図の下敷きには、すでに引いた『読書遍歴』における三木清の発言がある。三木は自身が青年時代に影響を受けた思想的動向として上記の4つを挙げ、それらはみな「自然主義に対する反動もしくは自然主義の克服」としてのヒューマニズムの発現だったと回想しているのである。さらに三木は言葉を継いで、文化主義とは教養思想がよりアカデミックに表現されたものであり、両者をともに底流したのが新カント派哲学であると語った。[12] 久山はこうした三木の回想を敷衍して、日露戦争後にあらわれた自然主義を「科学思想を背景にしながら人間の真実を凝視して、腐敗し形骸化していた古い道徳や慣習に反抗した文学思潮」と位置づける。そのうえで、「この思潮は［…］唯無理想無解決を唱えて、現実暴露の悲哀に沈む外はなかった。［…］このにぶい虚無感のなかでの沈滞に、人心はようやく自然主義に倦み、新しい理想を望むにいたった」と解説したのである。[13]

大正期の思想文化の動向がいずれも「自然主義への反措定の意味」をもつならば、[14] それはどのような脈絡で新カント派哲学と結びついていたのか。この点について久山は、比較思想史的な解釈をくわえている。新カント派出現の背景には、実証的な自然科学の影響力拡大をまえにして、ヘーゲルの壮大な形而上学の体系がもはや維持されがたくなるという状況があった。じっさい、ヘーゲルがベルリン大学総長在任のまま1832年に急逝すると、彼の学派は急速に分裂する。

こうしてヘーゲル哲学の崩壊の後には弁証法的唯物論とともに自然科学的実証的な唯物論や経験論が、哲学の一つの主流を形成するに至ったのである。しかしもちろん一面的な自然科学的唯物的世界観に人は長く止ることはできない。そこに自然科学の権限を十分認めながら、しかも人間の人格的文化的存在性をも正当に認める哲学の出現を待望する気運が醸成されたのも当然である。そしてこの気運の中でカントへの還帰が声高く叫ばれるに至った。それは自然科学の権限を認めながら、その限界を設定して理想主義の哲学を樹立したのはカントであったからである。この思想状況は自然主義の急激な勃興と、しばらくにしてその行きづまりの生じた明治末年の日本の思想状況に類似するものである。したがって新カント派の哲学が日本で歓迎されたことは、自然の事柄であった（下線は三谷による強調、以下同様）。[15)]

日露戦争後から第一次世界大戦にかけて一世を風靡した自然主義文学の特徴として、久山は「告白の形式を使用して、伝統的道徳に縛られながらそれを満たしえないで、その蔭に息づいている醜悪な人間の本能を描き、これを人間の赤裸々の実体として提示して、旧道徳の欺瞞性を痛撃した」と述べているが、[16)] これが田山花袋、徳田秋声、正宗白鳥などの小説を指しているのはいうまでもない。彼らは哲学や科学や宗教をすべて知的遊戯として斥け、同時にいかなる文学的技巧も排して、「露骨なる描写」に徹することによってのみ「事実の人生」、すなわち客観的現実への肉薄が可能と考えた。じっさい、自然主義の作品では、人生の目標や希望が主題化されることはなく、目的達成や問題解決に至らないまま日々を耐える人物たちの姿が容赦なく描き出されていく。

いったいこの思潮は、富国強兵策とあわせて高唱された個人レベルでの功利主義の夢、すなわち立身出世が、国家システムの整備とともにリアリティを喪失し、さらに日露戦争の勝利によって、そもそも国家の発展と個人の発展とを重ねて考えられる時代が終焉を迎えたことのあらわれに他ならない。

換言すればそれは、社会全体が方向性を見失って漂流し始めたポスト日露戦争期の所産、すなわち一種の戦後文学であった。他方、同じ状況をまえに、すでに整備された高等教育機関に学ぶエリート男性たちのあいだに、自分たちが歩んでいる選良としての人生行路じたいを反省する傾向が生まれる。[17] 「人生問題」に悩んで哲学的自殺を遂げた藤村操を先頭にした彼ら「煩悶青年」のみるところ、ひたすら卑近な現実の暴露をこととする自然主義の無理想・無解決という態度から、人生の意味について積極的な応答を引き出すことは到底できない。彼らが文学にあらわれた自然主義に飽き足らず、その克服を目指したのは、けだし当然だったのである。

だがこうした知的状況は、久山が指摘するとおり、そのままヨーロッパ、とりわけドイツのそれと「類似」していたのだろうか。なるほど日本における反自然主義志向が、圧倒的な影響力を発揮する自然科学的実証主義に抗して精神科学ないし文化科学の立場を貫く新カント派哲学のうちに自己展開の端緒を得て、そこに強く傾斜したのはまちがいない。以下、その理路をたどりながら、両者のあいだに横たわる不連続面をも粗描してみたい。

文化価値のパトス

アメリカの参戦とロシア革命によって第一次世界大戦の戦局が転機を迎えていた 1917 年秋、東京帝大の哲学講座を牽引する桑木厳翼は主著『カントと現代の哲学』を世に問うた。[18] 同書は委曲を尽くしてカント哲学の全体像を描いているが、その理解はまさに新カント派に立脚するものである。じっさい彼はヴィンデルバントの思想を紹介した一章のなかで、以下のように述べている。

> ヴィンデルバントの事業は正しくカントの批判哲学を継承して其時代の問題に接せんとするにあった。［…］既に知識に二様あることを認め［…］個体的知識の普遍的知識に比して劣らざるのみならず、寧ろ更に我々に意味深いものであることを認めた上は、哲学の問題を一般法則定

> 立の自然科学のみに限らず、更に特殊事実決定の歴史的文化科学に及ぼすべきことは理の視易き所ろである。而して規範の内容たる絶対価値は普通に真善美の語を以て現されるが、是等の価値は一般に歴史的文化的現象中に次第に発現せられるものであるとすれば、妥当の理説たる哲学は当然規範と価値との表現たる文化を対象とするものとなり、知識の哲学は終に此文化の哲学とならねばならぬ。[19)]

人間の知的な認識活動のトータルな解明を企図する新カント派は、自然現象のみならず文化現象を把握するさいの知の働きについて、それを心理的メカニズムに帰して説明する方向をとらない。それに代えて、普遍法則に服する自然的事象と個別的で一回的なものとして生起する文化的事象とを明確に区別し、後者をとらえる認識のあり方を個性記述的と特徴づけてその占めるべき場を確保する。文化的事象は、かならず意味や価値が付着したものとして認識され、また意味や価値は規範、すなわち当為＝「かくあるべし」によって根拠づけられる。そして、真善美といった超越的な文化価値がつねに歴史的に生成するものである以上、それらを対象とする学知は自然界の事実のみを扱う自然科学とはあり方を異にする文化科学となり、哲学は価値問題を包摂して人間の知的活動を把捉しようとすれば、文化哲学とならざるをえない。このように新カント派にあっては、学知における自然／文化の対立は事実／価値、存在／当為へと展開されるものであり、かつまた現実／理念とも対置されうるのである。

桑木厳翼は 1907 年から 1909 年にかけてベルリン大学に留学しているが、そのあいだに二度、ヴィンデルバントの講演を聴く機会を得たという。[20)] 帰国後、アカデミズム哲学の代表的存在のひとりとなった桑木は、第一次世界大戦後には吉野作造らの黎明会に参加してデモクラシー普及の論陣を張った。彼は 1919 年に「文化主義」と題する講演をおこなっているが、偶然ながら左右田喜一郎がやはり黎明会で「文化主義の論理」を掲げて講演したのもこの年のことである。ふたりは期せずして文化主義という同じキーワード

に想到したのだ。[21] 左右田は1904年から10年あまりヨーロッパに留学し、ドイツではフライブルク大学でリッケルトの指導を受けていた。テュービンゲン大学で博士号を取得ののち帰国し、家業の銀行経営に参画するとともに東京高等商業学校で教鞭をとった。彼の経済哲学も新カント派の直接の影響下で構想されたものである。ここでは左右田の講演に即して文化主義の様相を確認しておきたい。

この講演は黎明会の趣旨にふさわしく、官僚主義や軍国主義に抗して民主主義を宣揚するものだが、左右田の議論の主眼はむしろ民主主義によって促進されるべき文化あるいは文化価値の立場を主張することにある。

> 文化とは自然に対する語である。何等かの意味に於て与えられたる自然の事実を或一定の規範に照し之を純化し、窮極に於て其の理想とする所を実現せんとする過程の全体を称して吾等は之を文化と呼ぶ。之を其の内容につきて曰えば［…］吾等が呼んで芸術となすもの、学問となすもの、宗教となすもの、道徳となすもの、技術となすもの、法律となすもの、経済となすものである。［…］此の如き文化は価値実現の過程なりと見らるるに於てのみ其の全き意義が存する。［…］文化の帰趨、文化の目標、依つて以て文化をして意義あらしむる当為は即ち文化価値である。［…］一切の人格は文化の生産、創造にたづさはることによつて其自らの重要と価値を発揚する［…］。文化価値は其自らの論理を内在的に含み得る客観であり人格は之をして抑々意味あらしむる主観である。[22]

左右田もまた新カント派的理解に立ち、超越論的価値を目指すことをとおして根拠づけられるものとして文化を規定する。文化はしたがって価値実現の過程全体をさすことにもなる。ここに強勢点を置くとき、彼の「文化主義」が生まれる。すなわちそれは「論理上の普遍妥当性を具有する文化価値の内容実現を希図する謂はば形而上学的努力」なのである。[23] 人格とは、文

化価値実現を遂行する主体に他ならず、その具体的な姿はことに学知創出や芸術創造において顕著にあらわれる。このような左右田の文化主義が、やがて阿部次郎が唱えることになる人格主義と強く共振しているのは言うまでもない。[24] 人生の意義を自己の人格の成長と発展にみるとき、そこには向かうべき先がなければならない。超越論的価値とはまさしくその目的地であり、理想である。文化主義において、人格の完成という主観的努力は文化価値の実現という客観的活動と相即の関係に入ることができるのだ。かくて左右田は、ひときわ高い調子で呼号する。

> 各限られたる範囲に於ける文化所産の創造にたづさわる事を透して個人人格の絶対的主張に普遍妥当性を与えんとするに於て吾等人生の意義は尽く。文化主義とは是である。人格主義とは是である。[25]

文化主義の理路を説く左右田喜一郎の言葉はパトスに溢れている。それは文化論の立場からのデモクラシー擁護というよりもむしろ、人生そのものの意義を宣明する教説、まさに人生哲学というべきものであった。そして、この種の講演の聴衆の多くを占めたであろう知識人青年は、人生において何を、如何になすべきかの指針をそこに求め、じっさいまた聞き取ったにちがいない。荒川幾男が人格的実践主義と呼ぶこうした態度は、自然主義文学の発展と並行するかたちですでに明治末期に醸成され、やがて大正期の反自然主義の諸潮流へとつながっていく。当時の若い読者は、やがて多く読まれることになる西田幾多郎『善の研究』（1911）の一節にも、人格的実践の教説の片鱗を見いだしただろう。

> 世界はこのようなもの、人生はこのようなものという哲学的世界観および人生観と、人間はかくせねばならぬ、かかる処に安心せねばならぬという道徳宗教の実践的要求とは密接に関係を持っている。人は相容れない知識的確信と実践的要求とをもって満足することはできない。[…]

> 元来真理は一である。知識においての真理は直に実践上の真理であり、実践上の真理は直に知識においての真理でなければならぬ。[26)]

学知と理想

三木清と時を同じくしてハイデルベルクに滞在した北昤吉に『哲学行脚』という著作がある。後年政治家に転身することになる北は、世界大戦終結直前に日本を発ち、欧米各地を転々としたのち 1920 年春にドイツへ入って、ベルリンとハイデルベルクで哲学研究に従事した。この遊学のあいだ、廻国修行の武芸者さながらベルグソンやクローチェを訪ねて教えを乞うたり、各界著名人の講演に参加したりした彼は、帰国後その経験を一冊の本にまとめて出版した。書名に「行脚」とある所以である。客気盛んな書き手のつねとして文面には多分に我田引水の気味があり、たとえばリッケルトの演習で臨済禅や日本の神秘思想について報告して好評を得たと語るくだりなど、いかにも大風呂敷の感を免れない。だが、以下のリッケルトとの対話は無視できないものを含んでいる。

> 独逸には用法はないが日本には「文化主義」なる用法がある。独逸語で Kulturismus と訳すべきですかと聞いた。教授［リッケルト］は無理に訳せばそうなるが、併し無意味な語だ。自分の哲学は Kulturphilosophie ではあるが、Kulturismus ではない。蓋し、クルトウウアを実現された Kulturprodukt の意味に取れば、実現されたものは別に努力の対象にはならぬ。然らば未だ実現されない価値の実現に努力することを Kulturismus の意味に取るならば之は Prophetentum となる。学としての文化哲学の任務以外である。私の哲学では自然は説明し、価値は了解し、内在的意味は指示するだけのものであると答えられた。[27)]

Prophetentum とは預言ないし預言者としての振る舞いを意味する、宗教的含意の強い言葉だが、この対話がおこなわれたと思われる 1922 年のドイ

ツではきわめてアクチュアルな状況と関わっていた。すなわち、細分化・固定化のすすんだ制度的学問を排し、体験や直観に重きを置く反合理的主義態度を持して生の全体性の回復をめざすゲオルゲ・クライスの動きである。彼らは唯美主義の詩人ゲオルゲを卓絶した精神的指導者と仰ぐ、多くはアカデミズムの外で活動する若い知識人集団で、さながら預言者–弟子という秘教的でホモソーシャルな人間関係でも知られていた。前世紀末に端を発するゲオルゲ派のこうした非合理主義・反主知主義が、全面的な価値転覆の起きた敗戦国ドイツにおいて学生たちの心を強く揺り動かしていたのは、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』（1919）をめぐって巻き起こった論争からも知られる。ゲオルゲの影響下にあった若手から、合理主義精神と専門知重視に貫かれたその学問観を旧態依然たるものとして批判する声が上がり、激しい議論は一種の世代間闘争の様相を帯びながら、ウェーバーが1920年に急逝したのちも沸騰していたのである。[28)]

ウェーバーとリッケルトはともに新カント派的な学知理解を出発点にしている。[29)] 非合理的主義的な体験的直観を斥け、自然科学であれ文化科学であれ個別の専門分野における事実究明の作業を日々の仕事として耐え抜くというウェーバーの学問観は、新カント派における知的認識の位置づけからすれば当然の帰結だった。有機体たるべき生の全体がはらむ意味内容を告知し、実践活動をうながすというのは、リッケルトにしても学知の埒外の事柄である。北昤吉が尋ねた Kulturismus というドイツ語表現の当否についてリッケルトがかなりの違和感を口にしているのは、こうした文脈ゆえだったのだ。

彼らのこの短い対話から翻って考えるとき、新カント派哲学はあくまで、膨張する自然科学的実証主義をまえにして超越論的価値に根拠づけられた文化の領域を確保し、その探究に学的正当性を保証する立場を堅守するものといえよう。そのさい価値内容それじたいを語ることは、学知本来のあり方からして断念されねばならない。これにたいし、大正知識人の説く文化主義はかぎりなく価値内容を仰望する。それは人格完成の理想をめざす、時として求道的な行為実践として規範化されねばならない。彼らは新カント派哲学に

このような意味での理想追求の論理を求める一方、新カント派は超越論的価値を目的として遠望する営為を文化と呼んだ。換言すれば、前者は到達すべき理想を直接的で具体的な目的としたが、後者にしてみれば目的とはあくまでイデア的なものであり、それに近接可能なのは知の媒介的な営み、つまり学問でしかありえなかったのだ。先のリッケルトの発言は、理想主義的な大正知識人たちと学知重視の新カント派との懸隔を物語っている。彼らをとらえていた人生の意味や目的をめぐる問いや煩悶は、むしろ新カント派を克服しようとした 1920 年代初頭のドイツの若い学生の心情と共振しているとすら見えるのである。

むろん、大戦景気に湧く日本と敗戦の混乱のただなかのドイツとでは社会情勢にきわめて大きな差異があり、両者の文化状況について安易にその類似性や並行性を語ることは慎まなければならない。だとすると、まず検証するべき問題は、自然主義あるいは自然主義文学への反措定としての理想追求という 19 世紀末から 20 世紀初めにかけての思想文化史の構図じたいを丹念に再検証することにあるのではないか。それは、自然主義の内容とその具体的な現象形態を、日独の歴史的コンテクストに即しながら比較考量する作業になるはずである。

［注］

1） Seifert, Wolfgang (hg.): *Japanische Studenten in Heidelberg. Ein Aspekt der deutsch-japanischen Wissenschaftsbeziehungen in den 1920er Jahren.* Heidelberg: Verlag Regionalkultur 2013, S.10.
2） Ebd., S.11.
3） 滝川幸辰『随想と回想』、有斐閣 1948 年、142 ページ。
4） 加藤将之『ハイデルベルクの神話　新カント派時代万華鏡』、短歌新聞社 1972 年。
5） 生松敬三『ハイデルベルク ある大学都市の精神史』、TBS ブリタニカ 1980 年。
6） Seifert: a.a.O., S.7.
7） 加藤周一『日本文学史序説（下）』、筑摩書房 1999、398-407 ページおよび 440-449 ページ。
8） 三木清『読書遍歴』、『三木清全集第 1 巻』、岩波書店 1966 年、413 ページ。

9） 三木、397ページ以下。
10） 大橋容一郎「新カント学派」、須藤訓任編『哲学の歴史9／反哲学と世紀末』、中央公論新社2007年、378ページ以下参照。本稿における新カント派の思想内容の記述は、とりわけ413-419ページの多くを負う。
11） 久山康「大正期の思想的状況」、家永三郎ほか編『近代日本思想史講座1／歴史的概観』、筑摩書房1959年、232-237ページ。
12） 三木、401ページ。
13） 久山、233ページ。
14） 同前。
15） 久山、242-243ページ。
16） 久山、233ページ。
17） 教養主義の歴史社会学考察として竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』、中央公論新社1999年、232-234ページ参照。また高田里恵子「人格主義と教養主義」、『日本思想史講座4／近代』、ぺりかん社2013年、187-217ページも参照。
18） 桑木厳翼については宮川透・荒川幾男編『日本近代哲学史』、有斐閣1976年、93-102ページ参照。
19） 桑木厳翼『カントと現代の哲学』、岩波書店1917年、330-331ページ。
20） 桑木、335-336ページ。
21） 生松敬三『現代日本思想史4／大正期の思想と文化』、青木書店1971年、87ページ以下参照。
22） 左右田喜一郎「文化主義の論理」、鹿野政直編『近代日本思想体系／大正思想集Ⅱ』、筑摩書房1977年、5ページ。
23） 同前。
24） すでに1914年に『三太郎の日記』を発表していた阿部次郎が主著『人格主義』を出版するのは1922年である。
25） 左右田、7ページ。
26） 『西田幾多郎全集第1巻』、岩波書店2003年、39ページ。
27） 北昤吉『哲学行脚』、新潮社1925年、76ページ。
28） 姜尚中『マックス・ウェーバーと近代 合理化論のプロブレマティーク』、御茶の水書房1986年、141-163ページ。
29） ウェーバーとリッケルトの差異、とりわけWeltfreiheit概念の理解の違いについては、大林信治『マックス・ウェーバーと同時代人たち ドラマとしての思想史』、岩波書店1993年、8-16ページ参照。

※ 本稿はJSPS科研費22KK0004による研究成果の一部である。

（人文学研究科教授）

SUMMARY

Japanische Intellektuellen in Heidelberg

Zur Rezeption der deutschen Kultur in der Zwischenkriegszeit

Kenji Mitani

Nach dem Ersten Weltkrieg, da der kulturelle Austausch zwischen Japan und Deutschland wieder begann, nahmen manche Geistes- und Sozialwissenschaftler Aufenthalt in Heidelberg wie Jiro Abe, Kyoh Tsunetoh, Shuhzo Kuki, Hyohe Ohuchi, Kiyoshi Miki: sie beteiligen sich an den „humanistischen" Strömungen in der *Taisho*-Zeit mit der Hochschätzung der Bildung（教養）, Persönlichkeit（人格）und Kultur（文化）. Unter dem Einfluss der neukantianischen Schule, die den japanischen Intellektuellen schon zu Ende der *Meiji*-Zeit als Wegweiser zur Begründung der Geschichts- und Kulturwissenschaft vorgestellt wurde, studierten sie dort vor allem bei Heinrich Rickert seine Erkenntnistheorie. Die vorliegende Arbeit untersucht erneut ihre Beziehung zum Neukantianer, um die Kontinuität und Diskontinuität zwischen der idealistischen Landschaft in *Taisho*-Japan und der formalistischen Wert- bzw. Kulturphilosophie für das Bürgertum in der Wilhelminischen Epoche zu erleuchten. Bemerkenswert ist dabei die Äußerung von Rickert, dass er den in Japan verbreiteten Begriff des „Kulturalismus" als bedeutungslos, die Erhöhung der bestimmten geistigen Ziele als prophetisch absagt, während die junge Generation der japanischen Intellektuellen damals statt des bloß enthüllenden Naturalismus leidenschaftlich andere teleologische Weltanschauung sowie ihre praktische Ethik erlangen will. In dieser fast pathetischen Hingebung ist das gleichartige Bedürfnis nach dem neuen schöpferischen Leben zu beobachten, das sich unter den deutschen Studenten in den 1910er Jahren als expressionistisches Weltgefühl zeigt.